

○碧玉菴〔天正年中藍溪和尚開創。立花飛驒守宗茂檀越、居城筑後柳川、領十二万石、林泉藤村慵軒作〕

〔什宝に細川玄旨幽齋所持の文台硯筥あり。当寛政十年午の秋九月、紫式部の碑碣をこゝに建る、古墳は雲林院の卯辰の方式町許田隴の中にあり、都名所図会拾遺に出せり、碑は故障ありて当菴に建るなり。銘は畑維龍、由致は井後氏久米女、財主は浪花五十川菅正斉田中督榮なり。九月中旬碑を建るの日供養の法筵あり、観音懺法、奏楽一越調音取賀殿迦陵頻急胡飲酒羅陵王武徳楽。伶官七人岡、東儀、林、三家勤之〕

紫式部碑 (扁額隸書)

紫姫者、越前守藤為時女也、生而穎悟、才徳夙著、姫兄惟規嘗読レ書、姫在レ傍暗誦不レ失ニ一字、父撫ニ其背ニ曰、恨不レ令ニ汝、為レ男也、為時雅通ニ經史、迺以ニ其学ニ悉授レ姫、**■**二年稍長、給ニ事御堂公家、尋侍ニ上東門院、既ニ而適ニ左金吾宣孝、生ニ二女、亡レ幾宣孝歿矣、姫持操甚堅、独与ニ其女ニ居、覃レ思読レ書、通ニ五經三史、涉ニ仏老百家、詞藻富贍、逸思如レ湧、永延之朝有ニ十才女、紫姫為ニ之冠、内命著ニ編新語、姫乃著ニ源語六十帖、進呈焉、外託ニ艶詞、内存ニ諷諭、意匠結構、**■**藻婉麗、前無ニ古人、実女史之大手筆也、時之哲匠不レ能レ贊ニ一辞ニ也、姫有ニ容色、貴介公子以レ歌通ニ殷勤、姫拒レ之亦以ニ和歌、其詞婉曲、而貞烈不レ可レ奪也、其它事实、詳ニ于源語諸註及日記等、卒葬ニ城北雲林院、**■**今在ニ院東南數百歩、但墳揄存、已、今茲寛政乙卯有ニ尼師、傷ニ其日就ニ荒廢、募ニ縁四方同志、建ニ之碑、令ニ維龍銘レ焉、銘曰、

猗与斯人

窈窕淑貞

■德斯美_也

若_クレ_ノ瑶_シ若_クレ_ノ瓊

雲鬢霧鬢

歛_ムニ_ラ采_ラ榛_ニ荊_ニ

■管_{タル}之_{タル}

日星岷_フ明_ラ

爰_ニ建_レ爰_ス勒

永_ク存_スニ_ラ令_名

寛政七年歲次_ノ旃蒙單闕_ニ小春日

鶴山畑維龍子蝮甫識

紫式部のふるき跡に、猶も朽せぬ石ふみつくらむ事を、年来おもひはかる、尼君のせちなる心ざしをたすけ侍る人のありて、今茲寛政午の秋、万と、のほり事なりぬ。もとの■の上に建侍るへきを、今は畠の中にしあれば、蒼生のたなつものつゝるさはりにもと、まつ辻某君のゆかりもとめておなし紫野みとりの玉の庵に、此いしふみをすへつゝ、霊牌おさめまつりて、長月中二日、法の庭に緇素つとひよりて、誦経香花の供養したてまつるも、いとおほけなく、はたから人の聞なはいかゝいふらんとつゝまし、されと名のため世の聞えを貪るにあらず、たゝかしこき跡をあふきしたふの余なり。抑尼きみの願ひは、四方の人々に和歌こひて、碑をもいとなまはやの心にて、閑田翁慈延ひしりの学匠たちにも言葉をかり、かつ畑維龍のぬしに是が銘たのめるまゝ、此よしをしるし給へりしかと、出る息の入るをもまたぬよの中の、いとうしろめたく心いられて、浪華なる正斎のぬし督榮のぬし心をあはせていとなみつくれるなりけり。又はや

くよりうた奉れしもろ国の人々の手向をも、けふ此法の場にてこそと、折しも東のかたにみやつかへすなる林伶官のおとめ子と、もに、物の音の博士これかれ詣給へるを、やをらそ、のかして糸と竹とのしらへにそへて、敷しまの道の榮えも猶いくよ、に絶せしの心計になん。

たむけする身はいとふとも紫のゆかりに染よ言の葉の露
井後氏 久 女子

○〔当山之寮舎子菴、名画名筆頗多し、繁によつてこゝに略す〕